
歌声レストラン

風白狼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

歌声レストラン

【Nコード】

N6453Q

【作者名】

風白狼

【あらすじ】

異なる才能を持つ、二人の少年少女。ふとしたことで出会った彼らは、やがて同じ道へ向かっていく……

第1話 出会いは簡単なことから

はあ。途方に暮れ、空を仰ぐ。辺りはすっかり暗くなり、星が無数にまたたいている。一人の少年が、その閑散とした道に佇んでいた。彼の名はシエラン。何故こんな場所で途方に暮れているのかという、居場所というものを失ってしまったからである。

シエランは孤児である。身寄りのない彼は、とある才能を買われ、事務所で育てられていた。その才能とは、音楽の才能であった。彼は、作曲も作詞もでき、その上歌も得意だった。しかし、彼の作る歌は世間の嗜好にあわず、あまり売れなかったのだ。不景気な世の中では、事務所も売れない歌手をいつまでもおいておくことはできない。結果、彼は事務所をクビになってしまったのだ。

ふと、看板に目が止まる。料理店の看板のようだ。いくつかの写真とともに、名前が載せてある。しかしシエランは、値段のところ注目していた。安い。こんな値段で採算がとれるのかと疑問に思ってしまうほどだ。半信半疑だったが、シエランは足を踏み入れることに決めた。彼はできるだけ、経費を抑えたかったのだから。

店内は暖色を基調とした、明るくて落ち着いた雰囲気であった。

客の楽しそうな会話が聞こえる。そのうち、店員とおぼしき少女が出てきた。

「いらつしやいませ。お一人様ですか？」

シエランはそうだという返答をする。現れたのは15、6歳の少女で、茶髪は腰にかかるほど長い。シエランはカウンター席に案内された。ふと、シエランはこの少女のほかにだれも店内にいないことに気がついた。注文を聞いているのも、料理を作っているのも、片付けや掃除をしているのもこの少女であった。

シエランはひとまずメニューに目を通した。やはりどの料理も安

い。野菜と肉をスープで煮込んだ料理を注文してみる。それを受けた少女はパタパタと奥へ消えていった。

運ばれてきた料理は暖かいスープとほかほかのご飯だ。外の寒空を考えれば、これはありがたかった。スープを少し冷まし、一口のどに流し込む。肉か何かのだしと塩・砂糖だけというシンプルな味付けでありながら、うま味がつまっている。煮込まれた材料は甘味が出て、本来の味が引き出されている。加えて、ご飯とも良く合う。シエランはグルメではなかったが、素人なりに満点をつけても文句無しだと思った。

おそらくそのおかげなのだろう、店内は自然と笑顔があふれていた。

第1話 出会いは簡単なことから(後書き)

書きたいことがまだ入ってないです。

第2話 ハジマリノウタ（前書き）

長らくお待たせしました。モバイル投稿のためやや短めです。感想、アドバイス等ありましたらどうぞ。

第2話 ハジマリノウタ

ふとシエランが顔を上げると、店の隅にピアノが佇んでいるのが目についた。丁寧に手入れされて埃こそかぶっていないが、しばらくの間使われていなかったことが窺える。彼は店員である少女に聞いてみた。

「あれは君が弾くのかい？」

少女はシエランが見ている方を確認し、少しばかり目を細めた。

「いいえ、あれは私の祖父の物なの。譲り受けたはいいけど私は弾けないから……」

少女の瞳が、悲しく揺れる。そんな彼女を見て、シエランはあることを思いついた。

「俺が弾いてもいいかな？」

唐突な提案に、少女の目は見開かれた。しかしすぐに歓喜の声を出す。

「あなた、弾けるの？それなら弾いてあげて。きっとその方が、あのピアノのためにもなると思うから……」

少女の言葉を受けたシエランは、ピアノの前に座る。ふたを開け、試しに鍵盤を叩いてみた。小さな店に、ピアノの音が跳ねる。順々に鍵盤を鳴らしていく。どうやら調律はされているようだ。

シエランはゆっくりと演奏を始めた。優しくも力強いメロディー

が、部屋に響き渡る。調子に合わせて、シエランは歌い始めた。

ほがらかな朝日に命の声上がる
生まれし力高らかに

小さなその手で希望を掴み
小さな足で大地踏みしめ
永遠の旅路 進みゆく

空よ歌え海よ笑え
森の木々もあの鳥も
すべてこうして始まった

命よ歌え
尊き生命よ

最初はただ聞いていた客達も、徐々にシエランの歌に同調する。一つの流れは周りを巻き込み、いつしかそこにいた観客全員がその歌を歌っていた。歌が終わり、シエランが鍵盤から手を離すと、賞賛の拍手がわき起こった。その時誰も気付かないところで、店員の少女がこっそり涙を流していた。店に来ていた老人が立ち上がる。

「『ハジマリノウタ』か、懐かしいのう。若い頃を思い出すわい。」
老人はシエランの手を取り、両手でしっかりと包み込んだ。顔には満面の笑みが浮かんでいる。気恥ずかしくなって、シエランは頭をかいた。

「ええ、これは俺が音楽を始めたきっかけの歌なので…」

シエランがこの店で披露した『ハジマリノウタ』は、何十年と歌われ続けている名曲。自分の曲ではないけれど、シエランにとって
は思い出の歌。いや、彼に限らず大勢の人にとって、思い出深い曲
なのだ。老人に限らず、歌を聞いていた人々が賛美の言葉を述べる。
大観衆のコンサートでもなければ栄光あるコンクールでもない、小
さな店での演奏会。けれど人々の温かい言葉に、シエランは胸が熱
くなった。

本当に求めていたのは自分が人を喜ばせることかもしれないな、
とシエランはぼんやりと考えた。

第3話 人の楽しませ方

ふう。ため息をついた少年の足は、いつしかあの店へ向かっていった。仕事も見つからないまま、シエランは店の中へ入った。温かい雰囲気肌に触れ、店員である少女が出迎える。

憂鬱な腰が椅子に沈む。注文を済ますと、そのまま天井を仰いだ。そんな彼のもとに、一人の男性が近寄った。

「あんた、あの日ここで歌ってたよな？もしよかったらまた何か歌ってくれないか？」

おどけながら手を顔の前で合わせる男性に、シエランは了承の意を伝えた。料理ができるまで、まだ時間があるだろう。ピアノのカバーを開け、指を鍵盤で躍らせた。

歌ったのは、自分が一度書いた詞。人前で披露する前に消えてしまった。巧拙も知るはずがない。けれどこれを選んだのは、自分を試してみたかったから。もし誰も喜ばなかったその時は、音楽家として生きるのをやめよう。自分に才能がなかった、それだけのことなのだ。シエランは歌った。これが最後になってもいいように

曲が止んだ時に聞いたのは、温かい拍手の音だった。これが自分の求めていたものだ、少年は理解した。有名でなくてもいい。聞く人がいる。喜んでくれる人がいる。たったそれだけのことに、シエランは目頭が熱くなった。

運ばれてきた料理がテーブルに置かれた。渴いた喉に、心地よく流れる。仕事にひと区切りついたのか、少女がシェランの横に座った。

「歌もピアノも上手ね。いい歌手になれるんじゃない？」

少女の言葉にシェランは首を振り、視線を机に落とした。

「なれないから、俺はここにいるんだ。」

自嘲的な少年の物言いに、少女は目を見開いた。信じられないとばかりにゆっくりと首を振る。

「そんな…もつたいないよ。これだけ歌えるのに。」

「必要とされなければ、歌手にはなれない。歌の上手いやつが必ずなれる訳じゃないんだ。」

淡々と発せられる少年の言葉。少女は何も言い返せなくなって、ただ彼を見つめた。

「行くあて、ないの？」

「まあ、な。」

少年はそっけない返事をする。けれど少女は急に立ち上がった。

「じゃあ、ここで働きなよ。」

「えっ？」

少女の唐突な提案に、シェランは目を丸くした。少女の瞳には確固

たる決意が宿っている。

「この店で歌ってくれるだけでいいの。もちろん給料は払うし、あのピアノだって自由に使っていていい。それに、あなたの好きな時に歌ってくれていいよ。ね、いいでしょ？」

「そんな、いいよ。君に迷惑をかける。」

歌わせるために自分一人雇うなんて、申し訳ない。そもそも、この小さな店に人を雇う余裕があるのか疑わしかった。けれど少女はまったくすぐシエランを見据えた。

「それに、私はあなたの歌が聞きたいの。」

聞きたい。その言葉が心を動かした。聞いてくれる人がいるんだ。どこまで期待に応えられるかわからないけど、シエランは思いを固めた。

「…ありがとう。俺はシエラン。よろしく」

「私はアクア。よろしくね、シエラン。」

少女と少年は、互いに手を握った。

第4話 慌ただしい朝賑やかな夜

まだ闇の残る頃、少女の影は慌ただしく動く。ひやりとした独特の冷気の中、調理場を整え市場へ向かう。慣れた目つきで整然と並べられた食材を見、必要なだけ購入していった。店へ帰れば新たに仕事ができる。食材を整理して冷蔵庫に入れ、今日のオススメメニューを考える。そして今からでもできる仕込みをしておくのだ。

小刻みに聞こえる包丁の音と鼻腔をくすぐる香りに、シエランは目を覚ました。少女 アクアの用意してくれた部屋から外を覗く。1階の活気を見れば、彼女がすでに働き出していることが分かる。日はようやく地平線を抜けたところだった。シエランは一度伸びをする、欠伸をしながら下の店舗へ降りていった。

「あ、おはよう。ひよっとして起こしちゃった？」

「いや、大丈夫だ。」

降りてきたことに気づいたアクアが、明るく微笑んだ。シエランは寝ぼけ眼で返事する。実際はまだまだ眠たいのだが、何となく気になったのだ。

「何か食べる？少し待っててくれれば作るけど…」

アクアは下ごしらえをしながら尋ねた。

「ありがとつ、もらつよ。」

「じゃあ、ちょっと待ってね。」

一度下ごしらえを止めると、アクアは手際よく料理を作りはじめた。

そのひとつひとつの工程は、料理をしないシエランから見ても手が込んでいることが分かる。自分に妥協を許さない。つまり、それだけこだわりを持って作っているということだ。彼女の料理の美味しさはここにあるのだと、シエランは理解した。お客さんに対する愛情。それこそが、このレストランの賑わいなのだ、と。シエランはそのひとつひとつを噛み締めた。優しい味わいが口の中に広がっていく。同時に、心の中も温まる気がした。この自分に歌わせるために作ってくれたのだと思うと、目頭が熱くなり、慌ててそっぽを向いた。明るくなりはじめた空に、鳥達の歌が響いていた。

太陽が地平線に向かって沈んでいく頃、少女の経営するレストランは活気づき始める。そんな中シエランは、ふらりと下に現れてピアノを弾いた。客のリクエストに応えたり、自分の歌を披露してみたり。ただの食事場だったところに、音楽という娯楽が加わった。それも、酒場のような騒がしさではなく、むしろ静かな雰囲気だ。短くとも幸せな時間があるように、誰もが思っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6453q/>

歌声レストラン

2011年11月22日01時56分発行